



よく話し、よく笑うアケボノさん。

インド生まれのブシャン・アケボノさん（28）。その名前は、彼女が生まれる前に父が現地の雑誌で目にした「日本では、朝日の光のことをアケボノという」という一文に由来する。ではなぜ彼女の父は、遠く離れた島国の言葉を自分の子どもに与えたのだろうか。

日本への憧れ

話は1970年に開催された大阪万博に遡る。アケボノさんの祖父はインドブースのシェフとして来日した。帰国後、祖父はアケボノさんの父・ティカシュさんに日本の写真を見せては「日本人は優しく、景色は美しい。日本は素晴らしい国だ」と語り聞かせていたそう。日本への憧れを胸に育ったティカシュさんは十代になると母の急逝に伴い、一家6人の家事を担当。血筋なのか、美味しい料理で家族みんなが笑顔になるのが嬉しくて、次第に料理に熱中していく。そしていつしか、「自分も

祖父のように日本に行って、日本で自分の店を持ちたい」と思うようになっていた。そんなティカシュさんにとって、娘に日本の言葉を付けるということは自然な流れだったのかもしれない。そしてその娘であり、今回の主人公であるアケボノさんもまた、幼いころから料理が大好きだった。幼稚園児のときには一日中キッチンに座り、母が料理をする様子を見て、母を質問攻めにしていた。物心ついた時から料理人になることが夢だった。

日本での暮らし

1999年、アケボノさんが8歳になると父は単身で来日。東京でのインド料理店勤務を皮切りに愛知、福島と渡り歩き、ふと立ち寄った仙台という町に惚れ込んだ。都会でありながら緑豊かな環境と、知り合い同士ですぐに繋がれる、人間関係の濃さが彼には心地よかった。早速物件を探し、翌



仙台市に構えた自身の店でナンを焼く父・ティカシュさん。

年には仙台に自分の店をオープンした。

4年後、店の経営が軌道に乗ると父に呼び寄せられる形で一家が来日。こうしてアケボノさんの日本での生活が始まったのだ。中学2年生の多感な時期に日本の学校に編入。当初は全く日本語がわからなかったが、クラスメイトが彼女のために片言の英語で話しかけてくれたり、父のお店の常連さんが平仮名やカタカナを教えてくれたりした。料理好きゆえ卒業後は調理師学校に進学することを考えていたが、お店のお客さんにかけられた「食べものに興味があるなら、宮農（宮城県農業高校）に行ってみれば？」という言葉が、彼女の農業への道を開いた。「そういうえば私は料理が大好きなのに、じゃがいもや玉ねぎがどうやってできるのか、なにも知らない。それに、お父さんと同じ料理は作れても、それを超えることは難しい。食材をイチからつくれ

ば、もっと美味しいものが作れるんじゃないか」と、宮農の受験を決意した。友達が教科書に全部読み仮名を振ってくれて、漢字の習得と受験勉強を同時に進めた。

農業との出会い

無事、宮農に合格した彼女はそこで初めて農業に触れた。授業で枝豆を栽培したとき、小さな種がみるみる大きく育って食べものになったことに感動した。自分で育てた野菜を売る実習もあり、彼女はいつも上位3位内の売り上げを目指して一生懸命に販売した。作物ができる感動、人に喜んでもらえる喜び……料理人になりたいと

小学5年生のときに一時来日し、父のお店で手伝いをするアケボノさん。

